

インターバンクの声（2015 年 6 月 19 日）

ややハト派的と受け止められた米連邦公開市場委員会（FOMC）声明に加え、日経平均も後場に入って下げ幅を拡大したことも手伝って、東京市場でのドル円は一週間ぶりに 122 円台までドルが売り込まれた。欧州市場では値頃感からドルの買い戻しが強くなるのではとも思われていたが、序盤はドル売り圧力が継続、そのまま 122 円台の前半までドル売りが進みそうな勢いもあった。ただ、さすがに先週の黒田日銀総裁の円安牽制と受け取られた発言後のドル売りが下げ止まった 122 円 46 銭が意識されたのか、一旦反発を見せていた後の弱い米消費者物価指数の結果にも同レベル手前でドル売りが止められた。その後、簡単には 123 円台を回復できなかったものの、フィラデルフィア連銀景況指数や景気先行指数が予想を上回る結果を示したり、米債利回りが小幅ながら上昇したことによってようやく 123 円台に戻した。ニューヨーク市場の後半はドルの上値も重かったが 123 円を中心にドルの下値トライがないまま取引が進んだ。週末の東京市場は、昼までは下げ相場が続きそうだとの見方が多い。日経平均の動きを睨みつつ、日銀会合後の黒田総裁会見を待つことになりそうだ。

提供：SBI リクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。